

昭和28年4月1日第三種郵便物認可。平成3年4月25日印刷
平成3年6月15日発行（毎月1回1冊発行）定価280円

山人

山の情報誌 **GAKUJIN**

特集・ぐるりニツボン花の山旅

総力特集●

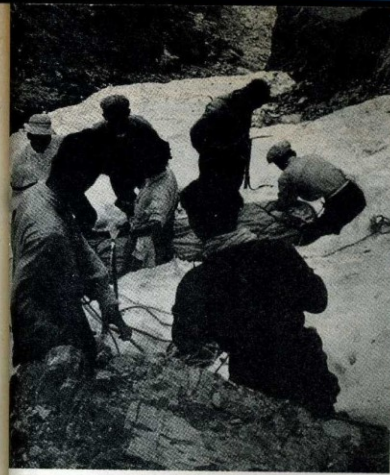
尾瀬再発見 4色刷り付録マップ付き

アウトドア遊学〈カヌー〉

15年ぶりに再燃したナイロンザイル事件

1991 **6** 特別号

ナイロンザイル問題の端緒となった昭和30年
1月の前穂高岳遭難者の収容現場(同年8月)



日本山岳会の名誉会員問題が火ダネ

15年ぶりに再燃したナイロンザイル事件

十五年前、日本山岳会の今西錦司会長(当時)の決断によって終止符が打たれていたはずのナイロンザイル切断事件が、ここへきて再燃している。

事件の後処理に疑問を残した人物が、わが国の岳人のお手本と期待される日本山岳会名誉会員に推挙されたことに、ザイル切断で遭難死した若者の遺族側が異議を唱えてきた。これに対して日本山岳会側がこのほど、その機関紙「山」増刊号(No.550)で、事件と名誉会員推挙の経過を踏まえて「名誉会員問題なし」と総括したのがきっかけ。これまでザイル問題と名誉会員問題は別次元の案件、という姿勢をとり続けてきた日本山岳会が、遺族側の再三、再四にわたる訴えに初

めて一括見解を出したことは、それなりに評価されているが、その内容については意見が分かれるところだ。

事件の端緒となった北アルプス前穂高岳東壁の転落遭難事故から早や三十六年。すでに故人となった名誉会員の取り消しを求め続ける遺族側の、哀しいまでに激しい告発姿勢もさることながら、機関決定をあくまでも貫こうとする日本山岳会側の執念に、改めて異様なものを感じとった関係者も少なくない。

そこで日本山岳会の「最終見解」が出されたのを機に、告発者・石岡繁雄氏と、事件をウオッチしてきたジャーナリスト・相田武男氏に寄稿してもらった。

(編集部)

社会常識から遊離した組織の病巣

相田武男・ジャーナリスト

切れなかったザイルの怪

ナイロンザイル事件で、登山者の命を危険にさらすことになった篠田軍治氏が、日本山岳会名誉会員に決定した、というニュースを見て、そういう人物を名誉会員とする組織の体質に大いに疑問を感じた。一昨年末のことだった。昭和四十七年、筆者は実弟の遭難後二十年近くもナイロンザイル事件で石岡繁雄氏が苦闘していることを知った。早速、石岡氏の自宅を訪ねて、遭難発生以来の膨大なスクラップと書簡を借用、ナイロンザイル事件の経過を知

った。その結果、昭和三十年四月に蒲郡で行われた東京製鋼の公開実験が、ナイロンザイル事件の発端であり、大阪大・篠田教授の役割が、重要な位置を占めていることが分かった。

蒲郡実験は、企業の責任を学者が覆い隠した典型的なケースだ。

一トン以上の重さに耐えるはずの登山用ナイロンザイルが岩角で簡単に切断、登山者が死亡したという状況の中で、当時、日本山岳会関西支部長である国立大教授が公開実験を行うとなれば、それは登山者の安全を追及するためのものであると、みなされるのは当然だ。

つまり「ナイロンザイルが簡単に切断するのは、これこれこういうケースのときである。だから、登山者は危険を避けるため、こうすべきだ」と、より安全な方策なり、対策を導き出す基礎になるものでなければ意味はない。

ところが、篠田氏は本来、ナイロンザイルが切断するはずの九〇度の岩角に一ミリの面とりを入れていた。実験を取材した当時のマスコミはじめ関係者は「ザイルは切断しない」というマジックを見せられたことになる。

篠田氏は、後に内部告発からトリックを見破られて「あれは、グライダ―、

船舶用ロープの実験」と言っているが、まったくの詭弁でしかない。

生存者（石原国利氏）によって、ナイロンザイルが切断した岩の角度と落下距離が図で示されており、その状況でザイルが切断するかどうかが目ざされているのに、なぜグライダーや船舶用ロープの実験をしなければならないのか。

しかも、篠田氏は実験前に、石岡氏に「ザイルは切れる」と言っていたのだ。さらに、公開実験を終わって、篠田氏の実験に協力した人が、「これまでの実験では弱かったのに、今日は、なぜ切れなかったのか」という話があった、との手紙が石岡氏に寄せられてもいた。

今回の「山」増刊号の執筆者は、「この問題のそもそもの発端は、蒲郡実験が行われた時の、両者の実験目的

のとらえ方の食い違いが原因であった（以下略）」と、しめくくっている。

これは、議論が堂々めぐりする。これまで述べてきたように、蒲郡実験はナイロンザイルが遭難現場の条件で切断するの、しないの、かの実験でなければ、意味がないと考えるのが正常な判断ではなかったのか。それをあえて執筆者のいうように篠田氏がロープの性能についての実験と考えた、というのは、噴飯ものだ。

篠田氏を名譽会員にする怪

この実験が一大学教授の肩書だけの人物によって行われたものであったら、結果は、また別の展開になっていたであろう。が、実験は日本山岳会関西支部長の肩書をもっていた人物によって行われたことに意味がある。この人物が、のちに登山者の安全を守ることが

遭難関係者の真実追及実る

ナイロンザイル事件 21年目に決着

「山日記」にお詫び

日本山岳会 編集に不行き届き

本報が昨年12月号に「遭難関係者の真実追及実る」と題して、蒲郡実験の真相を追及した。その結果、遭難関係者の真実が明らかになり、関係者の責任が明らかにされた。本報は、この結果を踏まえ、関係者にお詫びを述べたい。



一名死亡二名救助

岩稜会の前穂高で遭難

三重県大生市。岩稜会の前穂高で遭難した登山者2名が救助された。遭難した登山者は、前穂高の岩稜で遭難した。救助されたのは、前穂高の岩稜で遭難した登山者2名である。

ナイロンザイル事件の結着を伝える新聞報道

- 12・11 若山五郎の母・照正、今西会長および篠田に「山日記」の訂正と陳謝を要求。〈要求がいられない場合は法的手続きをとる〉
- 12・22 皆川完一「山日記」担当理事から石岡宛て書簡へ「山日記」の記事は篠田氏の署名入りなので執筆者の承認がない限り訂正はできない。
- 12・27 石岡は今西会長に「山日記」の訂正を要求。
- 1976・10・16 (昭51) 皆川日本山岳会「山日記」担当理事、近藤信行常務理事および石岡の三者で、31年度版「山日記」に関する覚え書に署名。〈昭和31年度「山日記」の記述につき別記文書を昭和52年度「山日記」に掲載することを確認し、ロープ問題のうち「山日記」にかんする一切の事柄が解決した。ここに三者の覚え書を交換する。〉
- 76・12 日本山岳会、52年度版「山日記」において、31年度版「山日記」登山用ロープの記事に関して遺憾の意を表明。〈昭和31年度版「山日記」では、登山用ロープについて編集上不行届があった。そのため迷惑をうけた方々に対し、深く遺憾の意を表する。〉「山日記」編集委員会。
- 1988・10・27 (昭63) 評議会で関西支部発議による篠田の名譽会員推薦は一部評議員の反対で見送られる。
- 1989・11・6 (平1) 評議会で今西寿雄、篠田軍治両氏の名譽会員推薦を決定する。
- 11・9 石岡「承服したが、会として所定の手続きを経て決定したものであれば、致しかたない」と東海支部尾上支部長に返答。
- 11・17 石岡、石原、電話にて山田二郎会長に推薦撤回要請。山田「現時点では取り消し不可能」と返答。
- 12・27 石岡、石原連名で撤回要望書提出。
- 11・2 支部長会議、理事会差し戻しの要望を否決。
- 12・19 石岡、石原名譽会員取り消しの要望書（一回目）提出。
- 1990・1・11 (平2) 評議会、取り消し不可能と再度決議する。
- 1・31 石岡、石原に撤回不能を回答。
- 2・19 石岡、石原要望書（二回目）提出。
- 5・14 石岡、石原要望書（三回目）提出。
- 同時日本山岳会役員及び東海支部役員等登山関係者に「コピー」を送付。
- 5・26 支部長会議ならびに平成2年度通常会員総会にて山田会長より会の見解を説明。
- 10・7 篠田氏、肺がんのため死去、86歳。
- 90・9 東海支部長名で本部に名譽会員取り消し願書提出。
- 1991・3・21 (平2) 本部機関紙「山」増刊号発行。（敬称略）

使命でもある日本山岳会の名譽会に推される、ということに異論が出るのは不思議ではない。日本山岳会が、出された異論に対して、充分説得力ある説明なしに名譽会員の決定をしたことは、日本山岳会がいかにかに社会の常識から遊離した組織であるかをうかがわせ

昭和五十二年版「山日記」で、三十一一年版の登山用ロープについての篠田氏の記述について、「山日記」編集委員会によって「遺憾の意」が掲載されたが、当時、訂正について篠田氏に要請したものの、篠田氏はこれに応じなかつたため、やむを得ず編集委員会による「遺憾の意」の表明になった、という経緯もある。

筆者は、この「遺憾の意」をもって、日本山岳会が石岡氏の主張に軍配を上げ、安全論争にけじめをつけた、と考へる。

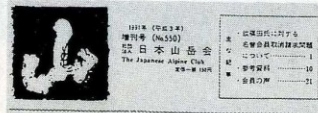
石岡氏には今西錦司氏はじめ、多くの日本山岳会員から石岡氏の安全追求への努力を慰労する内容の手紙が寄せられたことも付け加えたい。

それだけに、関西支部への尽力、マナスル遠征での装備面などでの貢献を理由に篠田氏が名譽会員に推挙されたという話を聞いた時は、耳を疑った。

例えば悪いが、犯人逮捕に優秀な成績を上げながら、一方では、目の前で凶悪犯罪が起きつつあるのを見逃している警察官が、優秀な警察官として表彰されることは、まずなからう。

篠田氏への名譽会員推挙は、このケースに似ている、といえないか。

スポーツで、人の命を守る



「山」増刊号(550) 特集
「故篠田氏に対する名譽会員取消請求問題について」(要旨)

はじめに
日本山岳会としては「個人の名譽にもかわる事柄を公開の場で論ずることは好ましくない」とする会長の意向もあり、極力石岡氏個人との対話による解決をはかろうとしたが、現状ではかたよった見解のみがひろがり、誤解を生ずる恐れも出てきた。経緯を説明、併せて参考資料も公表し、会員各位の判断にまづこととした。

四五〇人全会員の賛同を得ることは、むしろ会の性格に反するが、これ以上の論争継続は不毛の結果と感情的対立になりかねないことを深く危惧する。今後、関連する投稿があつても、よほどのことがない限り公表をさけないと思ふ。

四「日本山岳会からの回答文」
平成元年11月6日の評議員会で名譽会員推薦について審議。ザイル問題も含めて審議したが、篠田氏の功績から推薦は当然との意見が数多く開示され、異論は全くなかつた。

その後、石岡、石原両氏より山田会長宛てに電話および文書で、名譽会員就任反対の訴えと取消希望書が寄せられ、東海支部からもこの件の理事会への差し戻し要請があつた。

そのため、極めて異例の措置ではあるが、支部長会議での意見聴取と再度の評議員会で確認の手続きを踏んだ。しかし二、三の質問はあつたものの、前回の決議は充分な審議の末、適法になされておられ、取り消すこととはできないことが確認された。

五「取消希望書の概要と本会のコメント」
石岡氏側の要望書、議事録によれば、決定機関である評議員会と理事会の審議は不十分。本会の見解、評議員会後、東海支部経由で石岡氏の返事を求めたところ「決まったことはやむをえない」とのことでもあったが、数日後思い直され石岡氏から反対要望書を受けたときは意外としかいようはなかつた。しかし、引き続き取消要求があつたため前述のように異例の再審議をした。

なお、議事録については「全員一致としたのは陰謀である」とされているが、議事録は録音テープではない。論議を全録すると、かえって論議の自由を失はざる結果になる。

六「山日記」問題の客観的理解のために
昭和31・32年版「山日記」の篠田氏の記事が、52年版まで「ザイル切断事故に直接的責任がある」と考へるのは、その後の経緯からも無理がある。製品に添付する注意書の問題が

あつたとすれば、それは直接的にはメーカーの責任である。

七「平成二年日本山岳会総会ならびに支部長会議における山田会長説明要旨」
ナイロンザイルの特性は、その後の情勢変化によって、改めて論ずることの現実的な意味はない。加えて(篠田氏の)政府による叙勲、不起訴があり「山日記」の記述も、読み方によっては誤解を生ずるおそれがあるといえなくもないが、仔細に読めば新製品に対する危険性も指摘されており、危険きわまるというほどのものではない。また、蒲郡実験の主体はメーカーであり、利益を得たのもメーカーで、篠田氏はむしろ利用されたとみるべきと思はれる。等々と考へ、本会では石岡氏の主張に同調することはできない。その資格もないし、する気もない。

不幸な事故のあと、その原因をめぐるやりとりは同様の念を禁じえない。なお、ザイルの特性分析、そしてそれを登山者の常識とまでなされた石岡氏の努力は高く評価する。

八「おわりに」
この問題のそのものの発端は、蒲郡実験の目的のとなえ方の食い違いにあつた。即ち石岡氏側は「ロープ切断についての鑑定を期待」、篠田氏は「ロープ性能についての実験」と考へた。そのため篠田氏がデータをとるため岩角にRを付けたのを、石岡氏は切断しないよう見せかけた。石岡氏は切斷本能的な食い違いが最後まで尾を引いた。

では、篠田氏はなぜ沈黙を守られたのか、いろいろ付度があるが、氏が亡くなった現在、確かめようもない。井上靖氏の小説「氷壁」終結部で八代教授(注・篠田氏がモデル)がこう語っている。「ただ大切なことは、あの実験が事件の原因追及の実験ではなかつたということです。ザイルの性能の実験なんです。そして性能実験の結果をすぐ事件に結びつけてしまった。これは新聞の取扱い方も悪かつた。魚津君(注・事故のパートナー)の受取り方の誤りもありません。それから私の言葉不足もあつたと思ひます。事故から実験へと進んでいくなかで、当事者間や周囲、ジャーナリズムを含めて、さまざまな誤解や食い違いが複雑な折をおこしてきた。しかし、この井上氏の洞察が最も妥当な客観的評価ではなからうか。

「山」増刊号(550) 特集
「故篠田氏に対する名譽会員取消請求問題について」(要旨)

はじめに
日本山岳会としては「個人の名譽にもかわる事柄を公開の場で論ずることは好ましくない」とする会長の意向もあり、極力石岡氏個人との対話による解決をはかろうとしたが、現状ではかたよった見解のみがひろがり、誤解を生ずる恐れも出てきた。経緯を説明、併せて参考資料も公表し、会員各位の判断にまづこととした。

四五〇人全会員の賛同を得ることは、むしろ会の性格に反するが、これ以上の論争継続は不毛の結果と感情的対立になりかねないことを深く危惧する。今後、関連する投稿があつても、よほどのことがない限り公表をさけないと思ふ。

四「日本山岳会からの回答文」
平成元年11月6日の評議員会で名譽会員推薦について審議。ザイル問題も含めて審議したが、篠田氏の功績から推薦は当然との意見が数多く開示され、異論は全くなかつた。

その後、石岡、石原両氏より山田会長宛てに電話および文書で、名譽会員就任反対の訴えと取消希望書が寄せられ、東海支部からもこの件の理事会への差し戻し要請があつた。

そのため、極めて異例の措置ではあるが、支部長会議での意見聴取と再度の評議員会で確認の手続きを踏んだ。しかし二、三の質問はあつたものの、前回の決議は充分な審議の末、適法になされておられ、取り消すこととはできないことが確認された。

五「取消希望書の概要と本会のコメント」
石岡氏側の要望書、議事録によれば、決定機関である評議員会と理事会の審議は不十分。本会の見解、評議員会後、東海支部経由で石岡氏の返事を求めたところ「決まったことはやむをえない」とのことでもあったが、数日後思い直され石岡氏から反対要望書を受けたときは意外としかいようはなかつた。しかし、引き続き取消要求があつたため前述のように異例の再審議をした。

なお、議事録については「全員一致としたのは陰謀である」とされているが、議事録は録音テープではない。論議を全録すると、かえって論議の自由を失はざる結果になる。

六「山日記」問題の客観的理解のために
昭和31・32年版「山日記」の篠田氏の記事が、52年版まで「ザイル切断事故に直接的責任がある」と考へるのは、その後の経緯からも無理がある。製品に添付する注意書の問題が

あつたとすれば、それは直接的にはメーカーの責任である。

七「平成二年日本山岳会総会ならびに支部長会議における山田会長説明要旨」
ナイロンザイルの特性は、その後の情勢変化によって、改めて論ずることの現実的な意味はない。加えて(篠田氏の)政府による叙勲、不起訴があり「山日記」の記述も、読み方によっては誤解を生ずるおそれがあるといえなくもないが、仔細に読めば新製品に対する危険性も指摘されており、危険きわまるというほどのものではない。また、蒲郡実験の主体はメーカーであり、利益を得たのもメーカーで、篠田氏はむしろ利用されたとみるべきと思はれる。等々と考へ、本会では石岡氏の主張に同調することはできない。その資格もないし、する気もない。

不幸な事故のあと、その原因をめぐるやりとりは同様の念を禁じえない。なお、ザイルの特性分析、そしてそれを登山者の常識とまでなされた石岡氏の努力は高く評価する。

八「おわりに」
この問題のそのものの発端は、蒲郡実験の目的のとなえ方の食い違いにあつた。即ち石岡氏側は「ロープ切断についての鑑定を期待」、篠田氏は「ロープ性能についての実験」と考へた。そのため篠田氏がデータをとるため岩角にRを付けたのを、石岡氏は切断しないよう見せかけた。石岡氏は切斷本能的な食い違いが最後まで尾を引いた。

では、篠田氏はなぜ沈黙を守られたのか、いろいろ付度があるが、氏が亡くなった現在、確かめようもない。井上靖氏の小説「氷壁」終結部で八代教授(注・篠田氏がモデル)がこう語っている。「ただ大切なことは、あの実験が事件の原因追及の実験ではなかつたということです。ザイルの性能の実験なんです。そして性能実験の結果をすぐ事件に結びつけてしまった。これは新聞の取扱い方も悪かつた。魚津君(注・事故のパートナー)の受取り方の誤りもありません。それから私の言葉不足もあつたと思ひます。事故から実験へと進んでいくなかで、当事者間や周囲、ジャーナリズムを含めて、さまざまな誤解や食い違いが複雑な折をおこしてきた。しかし、この井上氏の洞察が最も妥当な客観的評価ではなからうか。

「山」増刊号(550) 特集
「故篠田氏に対する名譽会員取消請求問題について」(要旨)

はじめに
日本山岳会としては「個人の名譽にもかわる事柄を公開の場で論ずることは好ましくない」とする会長の意向もあり、極力石岡氏個人との対話による解決をはかろうとしたが、現状ではかたよった見解のみがひろがり、誤解を生ずる恐れも出てきた。経緯を説明、併せて参考資料も公表し、会員各位の判断にまづこととした。

四五〇人全会員の賛同を得ることは、むしろ会の性格に反するが、これ以上の論争継続は不毛の結果と感情的対立になりかねないことを深く危惧する。今後、関連する投稿があつても、よほどのことがない限り公表をさけないと思ふ。

四「日本山岳会からの回答文」
平成元年11月6日の評議員会で名譽会員推薦について審議。ザイル問題も含めて審議したが、篠田氏の功績から推薦は当然との意見が数多く開示され、異論は全くなかつた。

その後、石岡、石原両氏より山田会長宛てに電話および文書で、名譽会員就任反対の訴えと取消希望書が寄せられ、東海支部からもこの件の理事会への差し戻し要請があつた。

そのため、極めて異例の措置ではあるが、支部長会議での意見聴取と再度の評議員会で確認の手続きを踏んだ。しかし二、三の質問はあつたものの、前回の決議は充分な審議の末、適法になされておられ、取り消すこととはできないことが確認された。

五「取消希望書の概要と本会のコメント」
石岡氏側の要望書、議事録によれば、決定機関である評議員会と理事会の審議は不十分。本会の見解、評議員会後、東海支部経由で石岡氏の返事を求めたところ「決まったことはやむをえない」とのことでもあったが、数日後思い直され石岡氏から反対要望書を受けたときは意外としかいようはなかつた。しかし、引き続き取消要求があつたため前述のように異例の再審議をした。

なお、議事録については「全員一致としたのは陰謀である」とされているが、議事録は録音テープではない。論議を全録すると、かえって論議の自由を失はざる結果になる。

六「山日記」問題の客観的理解のために
昭和31・32年版「山日記」の篠田氏の記事が、52年版まで「ザイル切断事故に直接的責任がある」と考へるのは、その後の経緯からも無理がある。製品に添付する注意書の問題が

あつたとすれば、それは直接的にはメーカーの責任である。

七「平成二年日本山岳会総会ならびに支部長会議における山田会長説明要旨」
ナイロンザイルの特性は、その後の情勢変化によって、改めて論ずることの現実的な意味はない。加えて(篠田氏の)政府による叙勲、不起訴があり「山日記」の記述も、読み方によっては誤解を生ずるおそれがあるといえなくもないが、仔細に読めば新製品に対する危険性も指摘されており、危険きわまるというほどのものではない。また、蒲郡実験の主体はメーカーであり、利益を得たのもメーカーで、篠田氏はむしろ利用されたとみるべきと思はれる。等々と考へ、本会では石岡氏の主張に同調することはできない。その資格もないし、する気もない。

不幸な事故のあと、その原因をめぐるやりとりは同様の念を禁じえない。なお、ザイルの特性分析、そしてそれを登山者の常識とまでなされた石岡氏の努力は高く評価する。

ことは当然のことだ。危険のともなう率が高いスポーツでは、責任ある立場の指導者が安全確保のために、常に指導性を発揮することが要請されるのは、暗黙の社会常識だ。その意味で、ザイルの切断が即、生命にかかわる可能性が高い登山で、登山者を生命の危険にさらすことになった蒲郡実験をし、「山日記」の訂正に応じなかった篠田氏の責任は大きいはずだ。

蒲郡実験の虚偽を認め名誉会員を取り消せ

石岡繁雄 ●元・鈴鹿高専教授

「山」増刊号に示された日本山岳会の見解は、次のような理由で本質的に誤りである。

日本山岳会が篠田氏の名誉会員を妥当とする理由の要約が「山」の一三頁「(8)おわりに(資料をまとめての所感)」に記してある。すなわち、石岡側は蒲郡実験は前穂高岳での事故原因の鑑定(解明)のための実験といっているが、篠田氏はロープの性能についての実験と考えた。「この目的のために篠田氏はデータをとるために岩角にR(面とり)をつけた。(鋭いエッジで実験すると、直ぐに切れてしまっ



前穂高での実弟の遭難以来、ナイロンザイルの「安全神話」を告発しつづけた石岡繁雄氏

日本山岳会が、単なる山好きの集まるサークル的な集団ならば、名誉会員問題は、そうめくじらたてることではなからう。が、公的な性格を持つ団体であり、指導性と影響力を持つ故に、責任ある立場で篠田氏が行った行為が批判を浴び、その名誉会員推挙に疑問が生ずるのだ。

篠田氏の死去によって、この問題を感情論や篠田氏対石岡氏らの個人の問題に転化してはならない。それは、登山界に最もふさわしくないドロドロした政治や個人的利害を持ち込むことによる。

日本山岳会は、自らの権威を守るために、篠田氏を名誉会員としたことこの不明を率直に認めるべきだ。篠田氏を名誉会員に推薦した人たちは、故人に迷惑をかけたことを反省しなければならぬのではないだろうか。

理由の裁定も日本山岳会の名誉会員推挙も妥当、としている。

しかし私はそうは思わない。まず蒲郡実験の状況を記す。

一、蒲郡実験が行われたいきさつ

昭和三十年一月二日、前穂高岳で岩稜会員若山五朗(私の実弟)の事故死が発生。同パーティーのリーダー石原国利の報告では、新製品8号ナイロンザイルが、九〇度の岩角で約五〇センチ滑落しただけで切断した。当時としては石原報告での切断は考えられない。ザ

イルメーカーから指導を依頼された篠田氏、及び岩稜会は原因解明のための実験を開始。「山と溪谷」同年三月号は、篠田氏の実験結果の次号掲載を予告。篠田氏、岩稜会とともにナイロンザイルの岩角欠陥を確認して四月二十四日の両者の会合で意見一致。そのとき、篠田氏は四月二十九日の蒲郡での公開実験で発表すると語る。

二、蒲郡実験の内容

多数の登山関係者、報道関係者立ち会いのもとで篠田氏指導で開始。石原らが使用したザイルと同種のオレンジ染色8号ナイロンザイルを使用。石原報告の条件の実験、それより過酷な四五度の岩角、高さ三メートルからの落下衝撃テスト、三重岳連理事加藤富雄氏の要望で8号ナイロンザイルがエッジ上を横に滑りながら落下するテストも行われたが、いずれも8号ナイロンザイルは切断せず、メーカーの責任者は、このとおりナイロンザイルは岩角でも強いと説明した。

自然の岩角で弱いナイロンザイルが、

実験では強かったのは、前記まともに記してあるように、テストに用いられた岩角にRがつけられていたためである。篠田氏はそのことを知っていながら、黙って実験を指導した。

以上述べた蒲郡実験のいきさつと内容から、この公開実験は、ナイロンザイルが岩角欠陥をもつかどうか判定するためのテスト、また死因解明のためのものであり、日本山岳会がいうように単なるロープの性能テストではなかった。また、そのためにこそ次のような影響が発生した。

三、蒲郡実験の影響

(イ) 冤罪による人権侵害。蒲郡実験を、とくに中日新聞が六段ぬきで報道若山君の死因はナイロンザイルの切断ではないと記載、「山と溪谷」はザイルメーカーは科学的テストによってナイロンザイルを保証したと発表。その他、関根吉郎氏の「化学」への発表(「登山者は自分たちのミスをナイロンザイルに転嫁した」)等があり、死因は同行者と本人の重大な不始末とみなされた。そのため若山の家族は村人の白眼視にさらされ、私は父からウソの実験を行ったとして勘当、父は憔悴して翌年死亡。つまりところ石原報告及びそれを正しいとした岩稜会の実験は虚偽とみなされた。

(ロ) 登山界にナイロンザイルは岩角でも強い、という錯覚が生まれたこと。蒲郡実験に加えて篠田氏が実験データを三十一年度版「山日記」に発表したことでその状態が定着。三重岳連理岩稜会の七回に及ぶ訂正要求に、日本山岳会の反応はなく、危険状態は延々と続き、ナイロンザイル切断による事

白山書房の山の本

日本の岩場

CJ編集部編 ●1850円 最新刊！
待望の岩場ガイド決定版！ ロングルートを主体に約140ルートを最新情報で詳細に紹介。わかりやすいルート図と解説、写真入り。

（収録岩場）谷川岳（マチガ沢）／倉沢／黒伏山／黒伏山／明皇山（P6南壁）／P6フランケ、甲斐駒ヶ岳坊主岩／赤石沢／摩利支天、北岳バットレス、宮崎の岩場



一人の登山者が十日分の食糧とテントを担いで羽田から源流へ水流に沿って歩き始めた。この怪しげな目撃はゴミ落下事件、小河内ダム登攀の快挙、釣師との葛藤などを含みながら進んでいったが、大内尚樹著 ●2200円 発売中

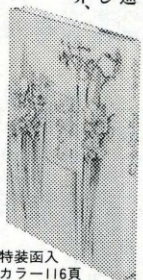
多摩川 水流紀行

河口から源流まで138km

美しい日本の自然を追って春秋の山を駆け巡り、30年に亘り描きしだめた山の花の世界花への愛の讃歌。シリーズ第一弾は早春の芽吹きの花々。

第1巻 水ぬるむ

小林政紘著 ●9800円 発売中



特装函入 カラー116頁

※定価は税込み価格です。

白山書房

〒153 東京都目黒区駒場4-7-8
☎03(3485)1309 FAX(3466)3964

故が続く。次に記すものは浦郡実験の影響を如実に示すものである。

関西支部長A氏は、四十六年十一月「新岩登り技術」を発行したが、その中でナイロンザイルを岩角にカラビナ並みにかけることを推奨した。自然の岩にはRはつけられていない。巻末の「制動確保論」が記すようにすぐに切れてしまう使い方を推奨した。

この記事は、その部分を執筆したI氏から私への五十年三月二十三日付け書簡に記してあるように、「山日記」の篠田氏の記事に基づいて記されたものである。I氏は鋭い岩とはナイフのように尖った角度の岩であり、ナイロンザイルが九〇度の岩角で弱くとは思

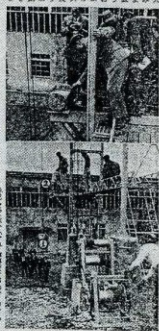
わなかったと記している。かくして山岳雑誌「岩と雪」が指摘したように「安全限界内の切断」が続発した。

なお、ナイロンザイルの切断事故は昭和五十年、国による安全基準が制定されるに及んでようやく後を絶つた。その基準によってナイロンザイルの岩角欠陥が確定し（Rをとってない九〇度の岩角では、篠田氏の「山日記」発表のデータの三分の一の強さしかなく、8.5ナイロンザイルは補助ロープとなった）、登山者は万一滑落してもザイルが岩角に引っかからないような登り方をするようになったからである。

もし浦郡実験で篠田氏が岩角にRをつけない実験を行っていたら、その間に死亡した少なくとも十四人は、死なずにすんだはずである。

強度は麻の数倍

蒲郡T製綱く画期的試み



この浦郡実験から「ナイロンザイル事件」ははじまったといえる

当時の日本山岳会は、「山日記」の発行者としての責任から、五十二年度版「山日記」で篠田氏の記事のために迷惑をうけ

た人々に深く遺憾の意を表したのである。

四、浦郡実験に使用された岩角にRがつけられていたことについて これに関連した事実がある。篠田氏は昭和三十三年十月二十二日「浦郡実験はグライダーや船舶の曳航繩の実験であって登山綱とは無関係」という声明を発表した。

さて、岩角にRをつけた実験を公開した篠田氏としては、この声明のごとく浦郡実験はザイルと無関係と説明する以外にない。もしも浦郡実験がザイルの実験ならば、実験に用いる岩角は、Rのつけられていない自然の状態であってほならない。すぐに切れてしまうデータこそが（ザイルの安全基準で行われたように）登山者の安全にとって必要なものである。Rをつければ、とくにナイロンザイルは切れにくくなり、その実験（データ）は登山者を錯覚させ死につながる。従って岩角にRをつけた実験は、ザイルの実験としては、見る人が信用するような状態、たとえば公開の実験では行っていない。

またそのデータをザイルのデータとし

て発表してはいけない。このことは前記まとめからでも分かることである。

しかるに篠田氏が行った公開の浦郡実験は、ザイルの実験以外のなものでもない。その証拠に篠田氏は、そのデータを日本山岳会発行の「山日記」に、ザイルのデータとして署名入りで発表した。従って篠田氏は登山者に対し積極的に、危険きわまる錯覚を与えたのである。同時に前記声明は虚偽であった。

なお「山」には、三十年六月二十九日発行の「毎日グラフ」に基づき、浦郡実験では「鋭い岩角で横に摩擦し衝撃を加えた場合、非常に切れやすいことが確認された」と記しているが、これは事実と反する。浦郡実験では前記したように、そういう実験は行われたが8.5ナイロンザイルは切れていない。「毎日グラフ」の誤りのことは昭和三十一年七月の岩稜会発行の「ナイロンザイル事件」に説明してある。

以上から、日本山岳会は、かかる行為を行った篠田氏の名誉会員を取り消すべきである。